

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00969

研究課題名（和文）立石寺の復興過程と庶民信仰の起源の解明 石造文化財の建立者の検討から一

研究課題名（英文）The Reconstruction Process of Risshakuji Temple and the Origin of Popular Beliefs: An Examination of the Builders of Stone Cultural Properties

研究代表者

荒木 志伸 (Araki, Shinobu)

山形大学・学士課程基盤教育院・教授

研究者番号：10326754

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：立石寺の石造文化財について磨崖供養碑を中心に、再検証が必要なものについて調査をおこなった。その結果、建立者に関わる新たな情報を獲得することができた。特に重要となる弥陀洞地区については、その詳細なデータを論文で公表した。また、石造文化財からみた霊場の固有性を明らかにするため、立石寺と松島瑞巖寺・雄島の比較検討をおこなった。その結果、磨崖供養碑の形式について、立石寺は板碑形に一本化されているのに対し、松島では石塔と同様の形式変遷が認められることがわかった。また、建立者についても、松島は雄島を中心に「屋号」が多く、複数の家で建立している事例が多いなど、立石寺との違いが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世から近世にかけて、立石寺に関する文献史料は豊富とはいえない。そこで、モノ資料による歴史の復元が重要になる。本研究では石造文化財に刻まれた建立者に関わる情報を中心に、近世における復興過程や庶民霊場としての初源的様相について解明することができた。

本研究で対象としたような日本列島各地に残る霊場は国内外からの注目度も高く、観光資源としての役割もある。文化創造都市を推進する山形市において、日本遺産にも認定されている立石寺に関する研究成果を広く発信することで、地域社会へと様々な側面で還元することが可能になった。

研究成果の概要（英文）：We conducted a survey of the stone cultural properties at Risshakuji Temple, with a focus on the polished cliff memorials, and other items that require re-examination. As a result, we were able to obtain new information on the builders. In particular, we published detailed data on the Midahora area in a paper. In addition, a comparison of Risshakuji Temple with Matsushima Zuiganji and Oshima was conducted to clarify the uniqueness of the sacred site from the viewpoint of stone cultural properties. As a result, it was found that the form of the monument was unified into a plate monument in Risshakuji, whereas in Matsushima, the form changed in the same way as that of the stone pagodas. In terms of the erectors of the monuments, the difference between Risshakuji and Matsushima became clear, as many of the monuments were erected by more than one family, and many of the monuments were erected by "yagou", mainly in Oshima.

研究分野：日本考古学

キーワード：霊場 石造文化財 磨崖 立石寺 松島 屋号

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究のフィールドである立石寺(通称:山寺)は列島最北域の霊場で、芭蕉の句「閑さや岩にしみ入る蝉の声」(『おくの細道』1702)でも著名な平安時代草創の山林寺院である。山内各所には、現在も卒塔婆や後生車等が奉納されている。大永年間には兵火を受けて一山焼失したとされ、その後は最上義光らが堂宇の再興に尽力した。しかし、元和8年(1622)に最上氏が改易されると、有力な後ろ盾を失ってしまう。近世期には奥の高野(『出羽國風土略記』1762)と称される庶民信仰の聖地として繁栄したことが知られるが、そこに至るまでの歴史的過程については不明なままであった。

近年、日本列島内における均一的な歴史観への反省として、地域的な特色を解明し、多様な文化の存在を発見する解明する研究が活発である。こうした問題意識のもと、申請者は立石寺山内に存在する石造文化財の調査を進めてきた。2020年10月の段階で奥の院地区を除く約8割の詳細な調査が終了していた状況にあった。石造文化財は、磨崖供養碑 崖面に直接刻む石碑 が近世初期～中頃、石塔類 墓標や供養塔 は近世中頃～末頃、石燈籠は近世後期以降と、各種の石造文化財と変遷していることを明らかにした。また、刻まれていた戒名、供養願文、地名、施主名等についても分析をおこなった。その結果、大永年間の焼失後、山形盆地周辺に居住する人々の支援のもと復興を遂げた、地域密着型霊場とも言うべき立石寺の姿が浮かび上がってきた。

2. 研究の目的

石造文化財を、いつ、だれが建立したのか、こうした当初の課題は徐々に明らかになってきた。しかしながら、建立者の具体像は、依然として不明なままである。立石寺の復興の担い手になったのは、一体どのような人々であったのだろうか。戦国期における堂舎の焼亡に加え、近世初期の段階で有力な庇護者を失った立石寺の経済的基盤は、相当衰弱していたと推測される。少なくとも、最上氏のあとに山形城に入った鳥居氏とは、立石寺は対立的な関係にあったことがわかっている。しかし当該期の立石寺に関する文献史料は限られており、そのみで解明することは困難であった。

復興を目指す時期に、立石寺山内で出現したのが石造文化財である。おそらくは時代の変化とともに、寺院側も新しい価値観を創造しながら外部の人々と接触するなかで生まれたのであろう。特に磨崖供養碑は、様々な属性から復興の象徴的遺物のひとつと位置付けることができる。こうしたモノ資料の詳細な分析と他霊場との比較検討から、立石寺石造文化財の建立者の実像について検討し、復興の実像に迫ってみたい。

3. 研究の方法

復興に関する歴史のなかで、磨崖供養碑はその空白の時期に建立された重要資料である。しかし、かつて調査した折に用いた懐中電灯等の器材類は、その後性能が格段に進歩した。その結果、過去の調査では不明であった銘文等が明らかになる可能性が出てきた。そこで、現地で数度にわたりLED懐中電灯を使用した再調査をおこなった。

また、石造文化財からみた霊場・立石寺の固有性を鮮明にする目的のもと、他の霊場の現地踏査もおこなった。特に松島(瑞巖寺、雄島)と出羽三山(羽黒山、本道寺)に関しては重点を置き、詳細な調査を実施している。また、東北をはじめとして他地域の霊場についても、中世から近世にかけての変遷や歴史的様相、石造文化財の在り方などについて、現地に赴き検討をおこなっている。

4. 研究成果

(1)立石寺弥陀洞の磨崖供養碑にみえる建立者像

全体的な傾向

種子、年月日、戒名、地名、人名、供養に関わる文言等や、大きさ(高さ・幅)と銘文内容について誌上で発表し、そのデータを掲載した(荒木『村山民俗』37号、2023)。そこにも記載したように、最古の紀年銘は元和年間のものである。かつて2012年の論文では元和二年としていたが、今回の調査で元和五年の可能性も出てきた(荒木「立石寺の霊場変遷と景観」『考古学雑誌』(2012))。最新のものも天保九年(1838)と報告していたが、今回の調査でその紀年銘が刻まれたもの自体を確認できなかった。実は年代の新しい磨崖供養碑ほど、弥陀洞の下部に集中している。高所に刻まれたものより降雪等の影響を受け、劣化が激しい。銘文はもちろん、磨崖供養碑そのものが失われてしまった場合も多く、本例もその可能性がある。

形式は1例を除いて、すべて板碑形である。その1例は、磨崖供養碑同士の間文字のみ刻むものである。後述するように、立石寺と松島では、磨崖供養碑の形式に関しては大きく様相が異なっている。

建立者に関して

解読できた紀年銘をもとにすれば、磨崖供養碑は最上家が改易された時期に山内で出現し、近世中頃まで山内で連綿と建立されていることがわかる。したがって、そこに刻まれた建立者を検討することは、近世期における立石寺の復興の担い手に関する手掛かりを得ることになる。

刻まれている地名について、既に山形盆地周辺のものが多いことを指摘した(荒木「山寺の石造文化財」『山岳修験』66号、2020)。弥陀洞には、山形六日町、山形横町、新庄舟形、西里村などの地名が刻まれていることが、従来の調査でわかっている。今回の調査で人名として、草苅左衛門、和久井助左、和久井 兵衛長次郎、和久井、市村 兵衛、市村太良治(2例あり)、市村(想カ)兵衛、市村、和久井 左右衛門、市村屋、市村 兵衛、片桐市郎兵衛、伊東金兵衛、大沼、和 左衛門、邊見庄左衛門と、多くの人名が確認できた。これらは地名の直後に記され、かつ「施主」と明記される例が1基あることから、建立主体者であったと解釈できる。

家名については、市村家と和久井家が非常に多い。特に市村家については、その名が刻まれた磨崖供養碑の分布を分析すると、弥陀洞の中心部付近の一定の範囲に集中していることがわかった。磨崖供養碑の出現当初から、弥陀洞地区で専有的に建立することが許されていた可能性もあろう。地名と関連付けると、山形六日町の「市村屋」や、山形横町の「市村太良治」と、近隣ながら異なる地名の例がみえる。さらに「市村屋」と屋号が存在するが、立石寺山内ではこの一例のみである。これも後述する松島とは異なる傾向といえ、建立者の性格の違いに起因するものと考えられる。

戒名については、圧倒的に成人の戒名が多い。1基の磨崖供養碑に、最大で9名分を刻む事例があった。これも既に指摘しているが、誉(譽)号や釈号等、宗旨・宗派の異なる戒名が近世前期の段階から確認できる(荒木前掲論文2012)。宗旨・宗派の異なる人々が、近世の早い段階から、立石寺の山内で磨崖供養碑を建立していたことがわかる。今回の調査で、弥陀洞では誉(譽)号は24例、釈号は3例を確認できた。山麓の天童市域では墓石上に既に院号が出現している時期であるが、弥陀洞の磨崖供養碑にはみえない。なお、子供の戒名は2例あり、それぞれ承応二年(1653)と享保二年(1717年)である。

建立者に関連して、若干の追記をしておきたい。磨崖供養碑のなかに1基「再建立」の文字が認められるものがあった。紀年銘はないが、市村家によるものである。弥陀洞の下部の方には、もともと存在した磨崖供養碑を削って新しく建立したような痕跡がみえるものがあり、注目される。また、大きさや形式が同一のものが2~3基ずつ並んで建立したと判断できる事例が複数存在する。建立の単位が存在しそうである。こうした事例は、弥陀洞以外の立石寺山内の別の地区の磨崖供養碑にも認めることができる。

(2)松島(瑞巖寺・雄島)の石造文化財と、立石寺との比較検討

それぞれの特徴

松島の瑞巖寺、雄島で石造文化財調査をおこない、立石寺との比較検討をおこなった。共に主となるのは磨崖供養碑と石塔である。まず、近世期の磨崖供養碑が数百基単位で刻まれる霊場は、全国的にみても稀といえる。一方で石燈籠は立石寺に顕著なもので、松島では非常に少ない。

磨崖供養碑の形式について、松島、立石寺で大きな違いが認められた。松島では石塔と同様に、磨崖供養碑にも様々な形式が採用されていた。一方で立石寺の磨崖供養碑の形式は223基のうち221基が板碑形(駒形)と偏重している。こうした傾向から、立石寺では磨崖供養碑の建立に際し、寺側等からの何らかの意思が強く働いていた可能性がある。

石造文化財の形式についても、異なる傾向が認められる。松島では近世に入り、磨崖供養碑と石塔が同時並行で建立されていた。一方の立石寺では、近世前期~中頃まで磨崖供養碑が主で、近世中頃以降に入れ替わるようにして石塔が出現する。さらに、近世後期には徐々に石塔も下火になり、近代以降は石燈籠が主流となっていた。立石寺は山岳霊場で、石造文化財が建立できるスペースが限られていたことに起因するものと考えられる。

立石寺の磨崖供養碑は、参道側へ内容がみえるよう意識的に刻まれている。さらには、そこにみえる施主名・地名も、山形盆地とその周辺と地域的に限定されていた。いわば建立者も参詣者も狭いエリアの同様の地域に属していた可能性が高い。立石寺の復興期に石造文化財建立が一助となった可能性もあり、貢献した地域の人々が誰であったかを示すようなアピール効果を狙ったのかもしれない。一方の松島では、例えば瑞巖寺境内遺跡の洞窟には扉状の施設が存在したことが柱穴等から確認できる。石造文化財は外部から遮断された空間に営まれ、不特定多数の人々が目にする機会はほぼなかったようである。一方、雄島では不特定多数の人々が来訪したものと考えられる。そもそも雄島では中世より様々な人々が集い、板碑も綿々と建立されていた。石造文化財の刻まれる歴史的経緯、霊場としての環境も、今後は視野に入れて検討する必要がある。

建立者に関する比較検討

松島では、石造文化財に屋号や氏族名を刻む事例が多数確認できた。一方の立石寺では、氏族名は近世中頃以降の石塔台座に刻まれるものがあるのみで、屋号については立石寺では1例しか確認できていない。その背景については、現段階では不明な部分も多いが、雄島に多数みえるような屋号は、商人層のものとも想定される。ただし、松島のなかでも瑞巖寺境内遺跡と雄島では、建立者に関して差異があるようだ。瑞巖寺参道遺跡では、近世初期の段階から仙台藩に關係する土族層が建立したものが存在する。これらについては、過去帳や周辺資料と銘文内容を合わせた検討により、より具体的な建立者像が解明できる可能性があるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 荒木志伸	4. 巻 37
2. 論文標題 立石寺弥陀洞の磨崖供養碑-供養碑建立者に関する検討-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 村山民俗	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒木志伸	4. 巻 24
2. 論文標題 石造文化財からみた霊場・松島 - 立石寺との比較検討 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山形大学歴史・地理・人類学論集	6. 最初と最後の頁 24 - 32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 荒木志伸
2. 発表標題 東北地方の石の文化財-山寺立石寺、出羽三山、松島の調査から-
3. 学会等名 やまがた夜話
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 荒木志伸
2. 発表標題 東北地方の石の文化財-山寺立石寺、出羽三山、松島の調査から-
3. 学会等名 文化地質研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------